

# 沖

俳句雑誌[おき]

5月号

通巻500号記念号

沖 発行所

## 五百冊の重み

能村 研三

「沖」は本号で五〇〇号を迎えた。結社として節目をつけることは大切で、私たちの「沖」も創刊からほぼ五年刻みで周年ごとに記念号の発行および記念大会を実施してきた。周年の節目とは別に、百号を昭和五四年一月に、この時は東京会館で記念大会も実施された。百五十号は昭和五八年三月に、この記念の時に合わせて私の処女句集『騎士』を刊行し、これまで初代編集長をお努めいただいた林翔先生から渡辺昭編集長に交代された。この時は、如水会館で記念大会も開催された。二百号は昭和六二年五月で記念号の発行のみ。二百五十号は平成三年七月号、この翌月号から私が編集長に就任した。三百号はちょうど二十五周年と重なり平成七年九月、祝賀会は浦安の東京ベイヒルトンホテル。来賓を含めて出席者は五百五十名にも及んだ。三百五十号は平成十一年十一月に、これに合わせて先師登四郎の十三句集『芒種』が刊行されている。四百号は平成十六年一月で、この時は先師登四郎は亡くなり私が主宰を努めており、これに合わせて私の第五句集『滑翔』を刊行している。そして四百五十号は平成二十年三月に、この号では林翔先生の特集がなされている。平成二十二年十月に創刊四十周年記念行事が行われ、記念号も発行された。

雑誌の何百号記念というのは、先師登四郎の時から、雑誌を充実し余り派手な記念行事

---

は行われなかったので、今回の五百号は記念号を発行することを第一義とし、記念大会については会員の交流が主体の内輪の会として実施することにした。

しかし「五百号」という数字の重みには感慨深いものがある。これまで、私の認識では俳誌の五百号などというものは、大結社の「ホトトギス」や「馬酔木」「若葉」などが発行するもので、私たちとは縁遠いものと思っていた。しかし、五百号という歴史的な価値は大きく、これまで「沖」の一号一号を五百冊積み上げた先人のエネルギーには頭が下がる思いがある。各号の「沖」では、一人一人が常に俳句の新しさを追及し毎月自分のベストの作品を投句し、これを選句した。五百号の重みの中には、創刊からこれまで「沖」の歴史と共に一筋に歩んで来られた方々、志半ばで亡くなられた方々、「沖」を離れて新天地で勉強されている方々がいらつしやるが、それらの方々がそれぞれ心を籠めて臨まれた思いがぎつしりと詰まっている五百冊である。

今回の特集号の編集では、五百冊の「沖」の中から、思い出に残る掲載記事をアーカイブスとして紹介することになり、私は発行所の分室で「沖」のバックナンバーを一冊一冊開いてみた。また、巻頭のグラビア頁のために、これまで「沖」を築いてくれた方々の懐かしい顔の写真の抽出作業もやらせていただいた。五百号までに「沖」に関わられた方々の人数を考えてみると、おそらくは何千人という数にも及ぶだろう。

「沖」は先師登四郎が創刊の理念として「伝統と新しさ」を掲げた。そしてさらに私が「沖」を引き継いで十一年目になるが、私は「ルネッサンス沖」を掲げている。これまで先師並びに先輩諸氏が築いてくれた「沖」をただ継承していくだけでなく、五百冊の重みを真摯に受け止めつつ、その時代の中での「伝統と新しさ」を求めていきたいと思っている。

---

## 催花の雷

能村 研三

海流の濃きをしるべに鳥帰る  
鋤くさびすげ替へてをり俄雪  
新機種を使ひこなせり春コート  
古書店の熟るる匂ひに春惜しむ  
運筆の凜たる葉書よなぐもり



引込み線の痕跡今に朧濃し  
推敲を重ねし跡や春寒し  
啓蟄やICチップの虹色に  
恋猫のけもの走りに消えにけり  
橋は春トラスアーチの構造美  
入室の指紋認証魚は氷に  
昼月の冷をたたへて涅槃の日  
朧夜の朗読にある節まはし  
林藪の笹に日の射す針供養

灯されて湖の輪郭春浅し  
古陶器の真贋見抜く春灯  
野火守は作務衣に髪を束ねをり  
荒行堂つなぐ伽藍の凍廊下  
見番の地は均されて薺咲く  
ふつつつと言霊醸す楳木かな  
地虫出づ活版校正懐かしき  
謙讓語重ねすぎたるお白酒  
負け方にルールがありて霾曇



魚は氷に植菌の楯薪積に  
偉丈夫で優しき人よ接木せり  
吸物に手毬麩ふたつ雛の日  
みちのくの出作入作種蒔けり  
春宵の蕎麦を待つ間の一合酒  
目借時善人ぶりを嫌ひけり  
万愚節便利過ぎたる世を嘆く  
極太の肉筆署名さくら冷  
最下位の走者に誉れ苜蓿

東吉野

うららかや霊地の水で句碑拭ふ  
記紀の地に父の分霊陽炎へり  
桜まじ句碑で落ち合ふ吉野人  
深吉野に花客もてなす蝮酒  
花仕度遅々とすすまぬ宇陀郡  
神奈備明日香の棚田に誘ふ春の雷  
のどかさや大和屋敷の板目壁  
村口を男綱で仕切る木の芽雨  
春宵や古代酒注ぐ素焼壺





たひらかに御陵の堀の春の鳩  
みささぎのそびらに育つ春大根  
春しぐれ神靈宿る要石  
謎石のルーツを解いて春惜しむ  
春騷雨古代の溝の石だたみ  
飛鳥野に催花の雷の渡りをり  
春北風〔沖〕五百号自祝五百段てふ踊り場に  
逃げ水や新を求むる旅にあり  
石鹼玉壊すこととは創ること

# 蒼茫集



三 月 淵 上 千 津

萌え木色着て活力を貰ひけり  
対と言ふ縁の支へ雛の宵  
鎮魂の三月の空みづあさぎ  
忘れてはならじと山河冴返る  
詠むことも祈りなりけり彼岸西風  
歩行器止めふらここそつと押してみし

永 劫 大 畑 善 昭

永劫のいまいまの日を猫柳  
馬小屋に裏窓のあり蝶飛び  
春眠の寝返りのほか無々むむ  
陽炎やむかしは十里歩きたり  
そこへ行けば吾が高原の春泉  
確信のさくらうぐひに投網打つ

樹相の張り 北川英子

牡丹雪時間ゆつくり消えてゆく  
逃水を極めむと終の免許証  
雨あとの樹相の張りや卒業す  
握手重ねて三月の分岐点  
眼前の椿いきなり入水せり  
烏雲に廃炉といふも生きつづけ

飛白めく 千 田 敬

山笑ふひとつ御空に月と日と  
梅園に女人つらなり私語弾み  
笙の音のどこより女雛目をほそむ  
飛<sup>かすり</sup>白めく記憶三月十一日  
鎮魂の二文字重し霞む日は  
瓦礫とふ山の彼方に烏雲に

童話村 上谷昌憲

雪原の一片として鷺発てり  
鈍色に消ゆる早池峰雪しづり  
深雪晴川馥郁と横たはり  
軒氷柱すだれ花巻農学校  
バイキング雪の明りの粥掬ふ  
童話村扉開けても開けても雪

自分史 千田百里

山笑ふ四輪駆動に揺さぶられ  
菜の花と海岸線と昼の月  
自分史に改行いくつ卒業歌  
魚氷に上る母音いよいよ響くなり  
大川に流そ懈怠も春愁も  
竜天にピエロが人に戻るころ  
試作中 久染康子  
きのふより少し太りて雪解瀧  
生きてゐる証の灯深雪村

色調を試作中なり春の虹  
野遊びのどこのつまりは寝転がる  
花迎へ兼ねて西下の仲間入り  
スカイツリー迂回してゆく春の雲

ライダー 遠藤真砂明

ライダー直進春光になりきつて  
遠足の大波に声盛りあがる  
まだ母のうしろ隠れに入園す  
若さ一体レガッタの急ピッチ  
若枝の力信じて柿接木  
握り締めたる春愁のもろ拳

夢をたたみ 藤原照子

一途さを直系の継ぎ菖蒲の芽  
啓蟄や防災リュックに小銭足す  
余震とも予震とも鳥雲に入る  
紙風船夢をたたみて児のねむり  
ナプキンの帆の林立や春ともし  
原子より原始へこころ青き踏む

こころざし

秋葉雅治

こころざし明治に高し菜の花忌  
茂吉忌の河原まだらに残る雪  
地震のあと一とせ耐へて路のたう  
帰路いそぐ吃水深き白子舟  
鳥帰る災後ひととせ遠出せず  
鷹鳩先生補化すと化して鬼怒ドナルド・キーン鳴門かな

槌・鑿

辻美奈子

啓蟄やしろがねを彫る槌・鑿  
てふてふを放てば山河濡れそむる  
ふらここの振幅傷つてはならぬ  
ままごとに似て落味噌のこれつぼち  
木の芽風泣いて小鼻の膨らみぬ  
枕木にかすがひの跡春の逝く

雛

田所節子

遠潮鳴り春満月の濡れてをり  
母が家てふ求心力や雛祭  
看護婦のつと起しゆく紙雛  
スカイツリー天に春光組み上ぐる  
青ぬたや気心知れし仲間みて  
山風に湿りのありし蔵狩

花菜雨

宮内とし子

豚小屋の仔豚かたまる花菜雨  
浅春やシュークリームに白き粉  
海苔粗朶の浜辺に乾くちぎれ海苔  
みちのくの葬に渡る雪解川  
逃水の向ふは寂光浄土かと  
やじろべゑ右に傾き春眠し

春昼の記憶

荒井千佐代

あるがままとは七曜を着ぶくれて  
老人会点呼ばかりの梅見かな  
老人が老人支へ探梅行  
春昼の記憶にちちの茶毘の煙  
トルソーはいつも北向き花菜風  
淋しくて触るる鍵盤花の昼

片棒

辻直美

義士祭や世紀は百年単位にて  
春愁のまた鉢植を増やしける  
朧濃しはたと忘るる夫のこと  
田面のまだでこぼこや彼岸入  
どぶはみな暗渠となりぬ荷風の忌  
片棒を担いでエイプリルフル

水琴窟

渡部節郎

寒梅の小枝の青さ匂ふなり  
するめの香ストープ列車の煤天井  
山焼きて落武者狩りの心地せり  
春愁や出過ぎて折れしシャープの芯  
連凧の絆誇りし唸りかな  
地虫出づ水琴窟に陽のあたり

西行忌

鈴木良戈

筑波嶺にかかる絹雲西行忌  
おほかたは顔知る童凧日和  
日表の海へなだるる椿山  
地震後の料峭スカイツリーの灯  
太陽へ向き全開の紅椿  
雛あられ患者にナースに医師らにも

青き踏む

河口仁志

消火器をねんごろに拭く寒の明

父の忌や朝からつづく木の芽雨  
宝冠のごと棒杭に春の雪  
鶴帰る天にきざはしあるごとし  
杖もまたわが身の一部青き踏む  
海越えて光まみれのつばめ来る

鎮魂

湯橋喜美

土筆野へ連れ出す靴の履きはじめ  
潮霏日の霏して鹿尾菜売る  
日脚伸ぶ街灯知らぬ間に点り  
双り子の性反しつつ桃の花  
判読もあり朧夜の宗教書  
鎮魂に涙の無力遅々と春

# 潮鳴集



すてん晴

佐々木よし子

雪囲解かれて時間動きだす  
下萌や歩幅大きく測量士  
叩かれて思はぬ方へ野火走る  
つくしんぼ噴砂かぶりし地に長けて  
すてん晴海苔簀に海苔の乾く音

独活ぐもり

安藤しおん

現世を隔てて室の独活ぐもり  
曇曇と休眠口座亀けり  
縄文のスパイス利かそ野蒜和  
朴芽吹く飛驒路の雲の洗ひたて  
逃水の送迎ありて滑走路

春の昼

七種年男

桜貝その拳では握れまい  
雁帰る空の円周率のごと  
しがらみも絆のひとつ白椿  
オルガンの音に窪みや春の昼  
紋白蝶風のページをめくりけり

どすんと

林昭太郎

三月来ドレッシングをよく振れば  
掌の中にマウスの火照る春の雪  
羊羹のずしりと黒し臍の夜  
霧や地下の深きを都営線  
啓蟄やどすんと下ろすガスボンベ

福島 茂  
日本 髪

炊き出しの煙まつすぐ鳥帰る  
春の雷嘘泣きの子を一喝す  
自転車の寝転ぶ堤花曇  
丸葉のにかき思ひ出紙風船  
雲の峰甲斐一国を取り巻けり  
蟻地獄雲ずんずんと低くなる  
ロッキングチェア揺らして夜の秋  
じいちゃんもばあちゃんもみて夏休  
海よりの光を粒にソーダ水  
万緑へふはつと発車ロープウェイ



越後路の一駅ごとの豊の秋  
稲穂田の千枚海へなだれ込む  
木曾谷はV字に開き星月夜  
草虱遊びはいつもかくれんぼ  
縫ふやうに列車入り行く紅葉川  
城下町角曲がるたび秋暮るる  
雪晴れのティアラのごとき甲斐の嶺々  
見えねども海に山脈鯨飛ぶ  
餅花に触れて行くなり日本髪  
住職の垂れたる眉毛福寿草



# 沖作品



# 能村研三選

自転車を降りて押す坂笹子鳴く  
半鐘ある十戸の村です春の雪  
つれあひは俄百姓穀雨かな  
浜街道一村ごとに春めけり  
白梅に少し軽めの帽子かな  
ぐーに勝つぱーの勢ひ冬木立  
紅梅や天心廟に青瓦  
そろそろと歩む坂道春の雪  
一茶句碑まろし冬日のあたたかし  
一茶来よ今宵すみだの朧月  
春立つや木に戻りたき大柱  
望郷や夢の中にも鶴の引く  
思はねば叶ふことなし梅真白  
薄氷のひと夜限りの風の紋  
如月の切つ先光る肥後守

千葉

浅野 吉弘

市川

町山 公孝

東京

関根 瑤華

四温かな先師の句碑の文字なぞり  
椿咲き先師の墓前清しけり  
谷中銀座いなせな春のここに  
草餅の糸くぼに和み濃茶かな  
黙の中風のささやき雛流し  
水仙の皆海へ向く祈りかな  
すこしづつ癒えてプリムラ満開に  
ほつこりと庭の日溜まりヒヤシンス  
いぬふぐり星のかけらの如ひかる  
歩道まで鉢を並べて種物屋  
春泥の照りにはとりは声を張る  
しづかさを溜めてヒマラヤ杉の春  
翻る野火信長のマントめく  
二百年の力のしづく寒紅梅

千葉

上田 玲子

岩手

上野 節子

茨城

岡澤 田鶴

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

半鐘ある十戸の村です春の雪 浅野 吉弘

「十戸の村です」と、口語の表現を使い一見おどけた調子の句で親しみ易さを感じる。しかし、何でもかんでもすぐに話し言葉が俳句に持ち込めるわけではない。最近はその「火の見櫓」も数少なくなってしまった。昔は木造の櫓があつて警鐘台には半鐘が吊るされていた。たった十戸しかなくても村内の絆の証として「火の見櫓」が建っていた。浅野さんは東北出身の方のようで、冬の間は雪に閉ざされていた村にも春の気配が感じられるようになり、降る雪ははかなくても心は明るく何か弾むものがある。ここで喋っているのは春の雪なのかも知れない。

ぐーに勝つばーの勢ひ冬木立 町山 公孝

比喻には機知のひらめきが必要であるが、その機知には鮮度

がなくてはならない。理屈をたどつて答が出るというような比喻では陳腐になってしまう。この句のからくりは中々巧妙である。じゃんけんの「ぐー」は掌を握りしめた凝縮を表し、「ぱー」は解放を表す。冬木立は落葉樹であれば皆葉を落し、青空に向かつて木々の枝が勢いよく張り出す。この解放感を作者はじゃんけんの「ぱー」で表現したかったのだ。単なる「機知」ではなく、「俳句的機知」として成功した句といえる。

春立つや木に戻りたき大柱 関根 瑤華

この句の面白さも、建築的な部材の一つとなつた「大柱」が森の中に育つ一本の木に絶対戻れる筈がないのに、それを虚として言い切つたところにある。切り倒されなければ、春になると一斉に芽を吹き生命感が溢れていたはず。そんな無念さはあるものの、人間の家屋の中の一部材としての役目を負わされた大柱には自負があるのかも知れない。

四温かな先師の句碑の文字なぞり 上田 玲子

作者の上田さんは、書道の先生をなさっている方であるから、句碑などに刻まれた文字にも専門家としての興味があつたのだろう。先日、先師登四郎が眠る菩提寺谷中の延壽寺の句碑を訪ねた時の句。先師が書いた筆勢をなぞりその偉業を孫弟子の一人として偲んだ。(以下略)